

在シドニー総領事交流録（第5回） ～ ANZAC Day ～

オーストラリアに住んでおられる方はご存知と思いますが4月25日はANZAC Dayです。

自分のおさらいを兼ねて申し上げれば、ANZACとは、Australia and New Zealand Army Corps（豪NZ軍団）の略で、オーストラリア軍が、連邦結成（1901年）からあまり年月を経ず参戦した第一次大戦において、1915年4月25日に英軍などと一緒にオスマン帝国のガリポリ半島に上陸作戦を行ったことに由来します。この上陸作戦及びその後に続く戦闘で、オーストラリア軍は8千人以上が命を落とし、1万8千人以上が負傷し、上陸作戦は失敗に終わったと言われています。

このため、4月25日は、勇猛果敢に闘った兵士たちの勇気と献身を称え、犠牲者を追悼する祝日となっており、オーストラリア各地で追悼行事が行われます。また、この日は、第一次大戦に限らず、第二次大戦、さらにはその後の海外派兵に参加して命を落としたオーストラリア軍兵士も追悼の対象になっています。

今年は、ガリポリ上陸作戦から110周年に当たるとともに、第二次大戦終結80周年に当たることもあり、私が出席したANZAC Day 関連式典でも、この二つに焦点が当てられることが多かったので、日豪関係の視点も交えて、ANZAC Day の意味合いを考えたいと思います。

私は、昨年10月当地に着任しましたので、今回が初めてのANZAC Day でした。まず気付いたのは、ANZAC Day の4月25日だけでなく、その数日前から各地でオーストラリア人兵士の追悼式典が開催されることです。実際、私は4月22日と24日の式典にも招待されました。

22日の式典は、シドニー中心部から西へ車で20分ほどのConcord Westという場所にあるココダ道慰霊Walkwayで行われました。80年前に終わった第二次世界大戦における、ココダ道の戦い（ニューギニア島）でのオーストラリア軍兵士の闘いとその意義を振り返るとともに、その後のベトナム戦争、アフガニスタン戦争などで亡くなられた兵士の追悼もする式典でした。こちらでは、私の他にNZ、米、英、パプアニューギニアの外交団も招待されていましたが、トルコは招待されておらず、ガリポリ上陸作戦というよりは、第二次大戦終結80周年に焦点が当てられる式典でした。



24日の式典では、オペラハウス前に大きな特設会場が設けられ、日没にあわせて追悼式が行われ、マールズ副首相・国防相、そして自由党ダットン党首に加え、ニューサウスウェールズ（NSW）州からはカー副首相とスピークマン野党党首、そしてハワード元首相、アボット元首相、モリソン前首相も参加し、外交団からは鈴木量博駐豪日本大使が参加するなど、大規模な式典でした。こちらでは、ガリポリ上陸作戦に加えて、1942年2月のダーウィン爆撃から始まるオーストラリア本土への攻撃に大きな焦点が当てられ、同年5月にシドニー湾で起きた日本軍特殊潜航艇によるクッタバル号撃沈、そしてその潜航艇で自爆した日本軍兵士について、豪州海軍が戦時中にも拘わらず慰霊を行ったこと等も説明されていました。連邦選挙まで残り10日を切るという多忙な中でも、副首相及び最大野党党首がともに出席し、主賓挨拶の際にも握手を交わすなど、ANZAC 式典では、オーストラリア国民が党派を超えて結束して、オーストラリア軍兵士の犠牲を悼むとともに、その功績を振り返る伝統が根付いていることが印象的でした。そして、外交団からは日本大使が唯一主賓として招待され、献花をしたことは、この式典が、過去を振り返るだけではなく、よりよき将来を目指していくためのものであると実感しました。



25日の ANZAC Day 当日に私が参加した式典は、ハイドパークのアンザック・メモリアルで開催された NSW 州退役軍人連盟（RSL NSW）が主催し、州総督が演説をされた追悼式典、同じく同連盟主催の当地外交団を招いての「Consular Star Ceremony」、そして私が住むウラーラ市（Woollahra Council）市長主催の式典でした。それぞれの式典の内容は、[徳田前総領事の「シドニー便り 2.0」](#)に詳述されているので、割愛しますが、その中でも印象に残ったのは、スワン・ウーララ市長主催の式典です。本年の ANZAC Day は選挙戦の真ただ中でしたが、独立系の現職議員に加え、対抗する主要候補も招待され、党派を超えてコミュニティ全体で追悼を行っていたことが印象的でした。また、市長の挨拶の中で、ガリポリの戦いから第二次大戦終結にかけて、尊い犠牲を払って守ったのは、豪州の安全だけでなく自由民主主義という価値観でもあったとの言葉を述べられていましたが、こうした視点が、連邦や州だけでなく、市のレベルでも、しっかりと共有されていることが新鮮でした。



これら一連の式典に出席して感じたことは、多くの豪州人には、ガリポリ上陸作戦から第二次大戦終結までの30年間が一つの大きな流れとして理解されているのではないかと思います（もちろん、私が日本総領事なので第二次大戦に焦点を当てた式典に招待されることが多かったとも言えると思いますが）。オーストラリアの歴史についての文献の多くは、ガリポリ上陸作戦への兵士派遣は、豪州が英国への愛国心・忠誠心を示すのが大きな理由だったとしています。ただ、これは単に愛国心・忠誠心だけの問題ではなく、当時豪州が置かれた状況を考えれば、ドイツや日本の脅威が高まる中、安全保障を頼れるのは英国しかないとの危機感の裏返しだった部分もあるのではないかと思います（日本との関係は、日英同盟があったので、複雑な部分があったと思いますが）。そうだからこそ、第一次大戦後は、ドイツの脅威がなくなり、最大の脅威となった日本と向き合わなければならなくなり、英国を頼りにしていたのが、太平洋戦争が始まって間もなく、その英国のアジア拠点であるシンガポールが陥落し、その直後にダーウィンが本土で初めて爆撃され、果ては豪州経済の中心ともいえるシドニーの海軍基地まで攻撃される経験を経て、ようやく第二次大戦終結により、大きな安心が連邦結成後初めて手に入れたという歴史観がある気がしました。また、自由と民主主義が、尊い犠牲を払って守った価値観であり、オーストラリアの基礎であるとの話もたびたび耳にしました。

第二次大戦終結後、しばらくの間は、日本人は ANZAC Day で攻撃の対象になりかねないとして、自宅待機を要請された時代が続いたと聞きます。それでも、多くの方々のたゆまぬ努力により、日本とオーストラリアは戦後の和解を成し遂げるとともに、日本は自由民主主義が浸透し、法の支配といった価値観を共有できる国であるとの認識が豪州の方々にも広く共有され、最良ともいえる今日の二国間関係があるのだと実感しました。これに加えて、第二次大戦終結から80年を経て、自由民主主義と法の支配への脅威が高まりつつある今日、日本とオーストラリアが、よりよき将来を共に築いていくために何をしていくべきか、思いを巡らせる貴重な機会が ANZAC Day ではないかと思った一週間でした。